随想

機械に奪われない仕事と若者に選ばれる仕事

愛知淑徳大学
文学部 准教授
加藤 智

AI（人口知能）が劇的な進化を遂げる中、近い将来、様々な仕事が機械に奪われるのではないかと言われている。週刊ダイヤモンド（2017年4月15日号）は、あらゆる職業を機械化代替率の観点からランキング化している。ここでは「機械化されないランキング」に注目したい。このランキングでは、1位に小学校教員、7位に中学校教員、20位に幼稚園教員、そして24位に高等学校教員と、教育に関わる仕事が軒並み上位にランクインしている。ゼミ生の多くが教員を目指している私にとって、この結果は歓迎すべきものだと感じている。

その一方で心配な事もある。近年の学校が置かれている状況だ。教員の長時間労働の問題は周知の通りだが、小学校でも外国語の教科化やプログラミング教育の必修化など、押し寄せる教育改革の波に疲弊する教員の声が次々とあがっている。

幼児教育・保育の分野では、教職員の待遇等の問題から離職者が多いことはよく知られている。ある幼稚園関係者は、園児募集よりも教員募集に多くの広告宣伝費を費やしているという。また、ある保育所関係者は、職員採用試験の受験生を自宅までバスで送迎しているという。人手不足の分野だが、ある大学関係者は、この分野を志す高校生は確実に減っているとこぼしている。

このような話は、決して対岸の火事ではない。近年の学校教育に関する様々な報道を見聞きすると、教員になろうという希望や意欲をもつ若者がいなくなるのではないかという懸念を抱かずにはいられない。

教員という職業は、機械に奪われない仕事であることは間違いない。しかし、同時に若者に選ばれない仕事になる危険性もはらんでいる。私にできることは限られているが、せめて教員を目指して本学に入学した学生には、教職の魅力ややりがいを伝えていきたいと思う。